

糸

柳静霖
交換留学生 中国

飛行機で日本に来た最初の日、リムジンバスに乗って和歌山に向かう途中、きれいな海を見た。キラキラ輝いている海は、とても美しかった。私の故郷は中国の南の島、海南省である。海に包まれて、いつも賑やかで、観光客が多い。海の近くに住んでいる私は、海に特別な感情を持っている。だから、和歌山の海はどんな様子であろうかと思って、来日の三日後、寮の皆さんと一緒に海辺に行った。海辺に着いた時はちょうど日暮れ時、観光客が多い中国海南省の海と違い、誰もいない和歌山の海辺では自然の美しさが見えた。その時私は改めて気付いた、ここは日本、ここは和歌山だ。



日本に来る前に、先輩の林さんは「勉強が一番大切だ。でもバイトも重要なことだ。いいバイト先を探そう!」と私に言った。中国の学生たちはいい大学に入るために、部活もないし遊ぶ時間もないし、小学生の時からずっと一生懸命勉強している。そのため、中国の学生たちはバイトすることがほとんどない。だから一度もバイトをしたこともない私はバイトに興味があった。

一般的には寮の皆さんのバイト先は二つの選択があり、一つはコンビニ、一つはレストランである。できる限り日本人の方と交流したいと思って、寮の近の「王将」というレストランを選んだ。そこのホールスタッフとして、私のバイト生活が始まった。

先輩のLさんは私が「王将」でバイトすることを聞いた時「王将はダメ、行かないで! 疲れるよ!」と私に言った。確かにそうだ。レストランだから、いつも忙しい。特に夜七時半以後、お客様が急に入ってくると大変な状況になってしまう。カップが足りなく、お冷はまだとどいてなく、テーブルもまだ片づいていない。初めてのバイトの日、外国人のスタッフは私一人だったので、忙しくて忙しくて、今何をしているのか全然分からなかった。もしほかのスタッフが手伝ってくれなかったら、きっと混乱して、疲れてたまらない気持ちになっていただろう。

いつも私に親切にしてくれる「王将」の店員さんのことを述べたい。

まず、Sさん、いつも独楽のように台所の中で回っていて、初めての日にもいろいろなことを教えてくれた。「すごいな」と思ったが、彼は面白い一面もある。Sさんは時々変な顔をして、私達を笑わせる。ある日、私は自転車で「王将」の前を通った時、ガラスをきれいにしているSさんは急にガラスに顔をつけて笑ってくれた。びっくりしたけど、面白いと思った。

そして、Iさん。最初は冷たい人だと思ったけど、ある日、私は自分の名前のついたカードを忘れてしまった。Iさんは何も言わず、新しいカードを私にくれて、私の名前

を入力してくれた。名前を入力していた時、キーボードの使用があんまり上手ではないが、ただ笑って、私と雑談しながら、完成させてくれた。バイトが終わり、私と晩ご飯を食べた時、「柳さんは私の孫みたい、若いし活気がみなぎる」そういう話をしながら、手作りのレモンティーをくれた。あの時のIさんの笑顔はとってもきれいだった。

最後に、Tさん。Tさんも優しい人だ。毎回バイトが終わる時、Tさんは冷蔵庫からお菓子を取り出す。七五三の時も「君たちはまだ子供だ」と言いながら、お菓子を私達にくれた。私が働いている店は、いつも来るたくさんの客さんがいる。そのお客様が来る時、Tさんが案内して、ちょっと雑談する。まるで知人のようだ。留学生だから、お客様の要求を理解できないこともある。その時、Tさんはお客さんに「この人は留学生でまだ慣れていないのですみません」と説明してくれる。

そしてお客様も「頑張ってるね!」と言ってくれる。

疲れるバイト、忙しいバイト。毎回バイトが終わったあと、疲れて、何もしたくないが、私は後悔していない。人と人との繋がりというものそんなに簡単に説明できるものではないが、私はアルバイトを通して私なりに分かったような気がする。人々は善意をもって、いつの間にか人との繋がりを結ぶ。それはバイトする前の私には理解できないものだった。田舎にも田舎のメリットもある、これは大都市では感じにくいものだと思う。

中島みゆきの「糸」に「縦の糸はあなた 横の糸は私 織りなす布はいつか誰かを暖めうるかもしれない」という歌詞がある。

私達は「善意」という糸で繋がりを結び、和歌山の一部になったような気がする。

